

シヴァ教再認識派の知我不異論と 仏教無我論批判

川 尻 洋 平
(広 島 大 学)

0. 問題の所在

インド思想史は、常住なるアートマンの存在を認めるか否かによって二つの伝統に分けることができる。アートマンの存在を肯定したのは、ヒンドゥー教やジャイナ教であり、他方それを否定したのは、無我論を主張した仏教や唯物論者である。これら二つの伝統は、アートマンの存在をめぐる論争を繰り広げた。9世紀頃よりカシュミール地方に台頭した一元論的シヴァ派に属する再認識派もまた、アートマン論者として仏教の無我論を批判した。しかし、無我論を否定し、アートマンの存在を認めるヒンドゥー教の哲学諸派においても、アートマンの特質に関しては見解の相違がある。

本論文の目的は、ウトパラデーヴァ (ca. 925-975)、アビナヴァグプタ (ca. 975-1025) に代表されるシヴァ教再認識派におけるアートマンの特質を明らかにし、仏教徒の無我論を、再認識派がどのようなアートマン観に基づいて批判したのかを解明することである。

1. アートマン＝主宰神シヴァ

再認識派において、認識主体の本質であるアートマンは主宰神シヴァに他ならない⁽¹⁾。主宰神に他ならないアートマンが、現象世界の個我 (jīva) と非精神的なもの (jaḍa) すなわち対象として光照することによって、「私」という認識主体と「これ」という認識対象からなる現象世界が成立している⁽²⁾。再認識派によれば、主宰神に他ならないアートマンは非限定的な認識主体 (aparimitapramāṭṛ) といわれ、現象世界に顕れた個我は限定的な認識主体 (parimitapramāṭṛ) あるいはマーヤー認識主体 (māyāpramāṭṛ)⁽³⁾ といわれる。非限定的な認識主体は、自らのマーヤー能力によって自己の光照の一部を隠蔽することを通じて、個我として現象世界に顕れるのである。

2. アートマン＝精神性

2.1. 非限定的な認識主体

再認識派が属する一元論的シヴァ派の創始者であるヴァスグプタによれば、主宰神に他ならないアートマンとは精神性 (caitanya)⁽⁴⁾ である。ウトパラデーヴァは、このことを前提にして、アートマンを「精神的なもの」(ajaḍa) と形容する⁽⁵⁾。アビナヴァグプタは次のように注釈する。

IPV 1.1.1: ajaḍātmā iti, yasya tu vaiśeṣikāder jaḍa ātmā sa siddhiṃ
karotu īśvaraviśayām / anyas tu sām̐khyādir niṣedham / sām̐khyo
'pi viśayāvabhāsanarūpaṃ jñānaṃ buddhidharmam icchan ātmā-
naṃ vastuto jaḍam eva upaiti /

『『精神的なアートマン』(ajaḍātman) という〔語〕について〔述べ

る]。しかし、ヴァイシュエシカ学派などにとって、アートマンは非精神的である。彼〔ヴァイシュエシカ学派など〕は主宰神を対象とする確立をなすならなせ。

一方、サーンキャ学派など他のものは否定を〔なすならなせ〕。サーンキャ学派も、対象の顕現を本質とする認識は統覚の属性であるとみなすので、アートマンを実際にはまさに非精神的なものとみなす。まずはじめにヴァイシュエシカ学派のアートマン論が否定される。同派においてアートマンは実体であり、非精神的なものである⁽⁶⁾。アビナヴァグプタによれば、「アートマン」が「精神的な」と形容されることによって、ヴァイシュエシカ学派のアートマンが非精神的なものであるという主張 (jāḍātmavāda) が否定されるのである。

またサーンキャ学派の見解では、アートマンとも呼ばれる精神原理であるプルシャに精神性が認められる。その意味では、同派にとってはアートマンは非精神的なものではない。しかし、日常的な経験主体は、非精神的な物質原理であるプラクリティから展開した統覚 (buddhi) が、自我意識 (ahaṃkāra) によって誤って自我であると考えられたものである。そして同派は、認識を非精神的である統覚の属性であるとみなす⁽⁷⁾。アビナヴァグプタによれば、このことによって、同派は認識を本質とするアートマンを非精神的なものとみなすことになってしまうのである。したがって、サーンキャ学派の見解も否定される。

2.2. 限定的な認識主体

再認識派によれば、現象世界に現われた個我に他ならない限定的な認識主体も精神的なものである。アビナヴァグプタの弟子であるクシェーマラージャは次のように述べる。

PHṛ6: tanmayo māyāpramātā //6//

「マーヤー認識主体 (māyāpramātr) は、その〔精神 (citta)〕を本質とする」

この言明は、ヴァスグプタの「アートマンは精神 (citta) である」という言明に基づいている。⁽⁸⁾ここでいうアートマンは、非限定的な認識主体ではなく、マーヤー認識主体のことを指している。⁽⁹⁾マーヤー認識主体は、精神 (citta) を本質とするものである。この精神とは、統覚 (buddhi)、自我意識 (ahaṅkāra), 思考器官 (manas) のことである。⁽¹⁰⁾マーヤー認識主体は、限定的な認識主体ではあるが、精神的なものであるという点では非限定的な認識主体と異ならないのである。

3. 精神性＝自主性

ヴァスグプタは、主宰神に他ならないアートマンを精神性そのものであると述べる。精神性とはいかなる意味であろうか。クシェーマラージャによれば、「精神性」は、認識や行為に関する完全な自主性 (svātantrya) を意味する。完全な自主性とは、認識や行為の範囲が限られた限定的なものではなく、一切を対象とする認識や行為のことである。このような完全な自主性は、最高主宰神にだけ存在する。主宰神シヴァには、精神性の他にも常住性や遍満者性などの属性がある。しかしそれらの諸属性は主宰神以外のものにもありうるのに対して、完全な自主性に他ならない精神性は主宰神以外にはない。なぜなら現象世界において精神性をもつ限定的な認識主体は、主宰神シヴァに依存して存在しているのであって、完全に自主的なものとして存在しているのではないからである。この自主性という精神性こそ、主宰神シヴァに他ならないアートマンの主要な本質である。⁽¹¹⁾

アートマンの自主性についてアピナヴァグプタは次のように述べる。

IPV 1.1.2: sa cāyaṃ svatantraḥ / svāntryaṃ ca asya abhede
bhedanam, bhedite ca antaranusandhānena abhedanam—iti bahu-
prakāraṃ vakṣyāmaḥ /

「そして、今問題になっているその〔アートマン〕は、自主的なものである。この〔アートマンの〕〈自主性〉とは、同一性における〔認識の〕多様化 (bhedana) であり、そして〔認識の〕多様性における、内的な〈統合〉 (antaranusandhāna) による同一化 (abhedana) である、というように様々に〔まさにこの論書で後に〕述べるであろう」ここでアートマンの自主性について、具体的に二つの側面が語られている。まず同一性における認識の多様化とは、自主的なアートマンが、唯一の認識に他ならない自己を、それに対する青や楽などの多様な対象という限定的添性によって多様なものとして現出せしめる、ということである。次に多様性における認識の同一化とは、自主的なアートマンが、想起の時に、同一の対象を持つ想起と過去の直接経験を一体化して現出せしめること、あるいは解脱時に、様々な対象をもつ認識を自己と同定することによって、現象世界を自己に帰滅させることである。このように自主的なアートマンは、唯一の認識に他ならない自己を様々な認識として生起せしめ、それを自己に帰滅せしめるのである。

自主性というアートマンの特徴は、再認識派特有のものであろうか。他のアートマン論者の見解と比較してみよう。サーンキャ学派のアートマンとも呼ばれる精神原理プルシャは、非精神的な諸原理の活動を観察するだけのものであって、自らは何も生み出さない非行為主体である。⁽¹²⁾ またシャンカラによれば、ブラフマンに他ならないアートマンは、寂静であり自足している認識のみのものであるから、行為をもたない。⁽¹³⁾ 再認識派の非限定

的な認識主体であるアートマンは、精神性そのものであるという点では、サーンキャ学派のプルシャ、シャンカラのブラフマンに他ならないアートマンと同じである。しかし精神性が認識や行為に対する自主性であるという点が、再認識派のアートマンを他学派のアートマンから区別するのである。

4. 無我論批判

4.1. 想起における過去の直接経験の現出

上述のように、再認識派において、アートマンは主宰神に他ならず、自主性という精神性を本質とするものである。このようなアートマン観をもつ再認識派は、どのような観点から仏教の無我論を批判するのであろうか。ウトパラデーヴァは無我論批判の中で、仏教論理学派の自己認識 (svasamvedana) 論、想起 (smṛti) 論、断定 (adhyavasāya) 理論を批判する。本稿で取り上げる問題は、知識の自己認識を奉ずる仏教論理学派が、想起に過去の直接経験が現われるということ、アートマンを認めることなく正当化しうるのか、ということである。

仏教論理学派によれば、想起は過去の直接経験を対象とする。なぜなら、同派によれば、想起は潜在印象 (saṃskāra, vāsanā) から生じるからである⁽¹⁴⁾。しかしウトパラデーヴァによれば、仏教論理学派はアートマンを認めることなくして想起に過去の直接経験が現われることを正当化しえない。なぜなら、想起と過去の直接経験に類似性があるとしても、過去の直接経験自体は把握されず、その把握がないから類似性も把握されないからである⁽¹⁵⁾。アビナヴァグプタは、仏教論理学派の見解にしたがって、想起において過去の直接経験自体が把握されないことについて次のように述べる。

IPV 1.3.2: naitat, yato hi asau tatsaṃskārasaṃskṛtāt samanantara-
pratyayāt utthitāḥ smṛtibodhaḥ, tena tatsadr̥ṣo bhavatu śākhāsan-
niveśa iva pūrvasanniveśatulyaḥ, na tu yo yatsaṃskārāt jātaḥ sa
tasya vedanasvabhāvo bhavati—iti yuktaṃ /

「そうではない。なぜなら、その想起という意識 (bodha) は、その
〔過去の直接経験の〕潜在印象によって能力を与えられた等無間縁
(samanantarapratyaya) から生じるからである。それゆえ、〔想起と
いう意識は〕その〔以前の直接経験と〕類似しているものであるべき
である。〔つまり、想起という意識は、〕ちょうど〔たわめられた〕木
の枝という形状〔が解き放たれたとき再び元に戻る〕ように、〔以前
の直接経験の対象と同一の対象を持つという点で〕過去の形状と類似
しているもの〔であるべきである〕。しかしながら、X〔すなわち過
去の直接経験〕の潜在印象に基づいて生じる Y〔すなわち想起〕、そ
の Y がその X の認識を本質とするものであるということはない。以
上が道理である」

仏教論理学派によれば、想起は、想起の等無間縁に基づいて生じる。この
等無間縁は、過去の直接経験の潜在印象によって想起を生起せしめる能力
を与えられたものである。⁽¹⁶⁾ このような等無間縁から生じるから、想起は、
過去の直接経験と同一の対象を持つという点で過去の直接経験と類似して
いるのである。しかし、自己認識を本質とする想起において、過去の直接
経験が対象として把握されることはない。想起において過去の直接経験自
体が把握されないことに基づいて、過去の直接経験との類似性も把握され
ないことをアピナヴァグブタは次のように述べる。

IPV 1.3.2: sadṛṣatvasyāpi gatiḥ avagamaḥ katham / na hi anu-
bhavajñānaṃ sādṛṣyaṃ gamayati, nāpi smṛtijñānam, parasparam

asaṃvedane dvayaniṣṭhasādr̥śyādhyavasāyāyogāt, anyasya ca tad-ubhayavedanarūpasya abhāvāt ...

「〔想起と過去の直接経験との〕類似性 (sadr̥śatva) をもどうして把握 (gati=avagama) しえようか。なぜなら、〔過去の〕直接経験という知識は、類似性を把握せず、想起という知識も〔その類似性を把握し〕ないからである。なぜなら、〔それら二つの知識は〕相互に認識しないから、二者を拠り所とする類似性の確定がありえないからである。そして、〔あなた方仏教徒の見解では、これらの知識〕以外にそれら両方の認識を本質とするものはないからである」

想起と過去の直接経験の類似性を把握するためには、想起自身と過去の直接経験の把握がなければならない。しかし、想起は過去の直接経験を把握することはない。なぜなら、自己認識を本質とする知識は自己以外の別の知識によって認識されないの、これら二つの知識が相互に認識することはないからである。したがって、想起によって過去の直接経験との類似性が把握されることもない。これら過去の直接経験と想起の両方を本質とするものは仏教論理学派にとって認められない。再認識派にとっては、アートマンこそがこれら二つの認識を本質としるのである。

4.2. アートマン=統合主体

過去の直接経験と想起という二つの知識を本質としるのは、アートマンだけである。このことをウトパラデーヴァは次のように述べる。

IPKV 1.3.7: cittatvam eva viśvarūpam ato 'tiriktasyānupapatteḥ, aśeṣapadārthajñānānām anyonyānusandhānam /

「〈意識〉という原理だけが、世界に他ならない。これ以外のものは、不合理であるからである。〔その〈意識〉という原理だけが〕あらゆる

る事象の知識の相互統合をなすものである」

〈意識〉という原理とは主宰神シヴァに他ならず、アートマンである。このようなアートマンだけが、過去の直接経験と想起という二つの知識を統合するものである。二つの知識を統合する想起の反省的意識についてアビナヴァグプタは次のように述べている。

IPV 1.4.1: viruddhapūrvāparaparāmarśasvabhāva eva sa iti parāmarśa ucyate /

「『あれ』という反省的意識は、矛盾する前後の反省的意識を本質とするものに他ならない、といわれる」

想起における「あれ」という反省的意識には二つの矛盾する反省的意識がある。一つは、過去の直接経験を想起している現時の反省的意識であり、もう一つは、直接経験した過去の反省的意識である。二つの知識自体は、お互いを対象とするものではないが、アートマンは両者の知識を本質としうるのである。したがって、アートマンは想起において「私は直接経験した」という形で過去の直接経験を本質とするものとして現出するのである。

5. 結 論

再認識派において、アートマンは主宰神に他ならない。主宰神に他ならないアートマンは精神的な存在である。サーンキヤのプルシャとシャンカラのブラフマンに他ならないアートマンは精神性ももつが、行為をなすものではない。再認識派の精神性とは、認識や行為に関する自主性である。精神性を認識や行為に関する自主性と捉える点に、再認識派のアートマンの特徴がある。

再認識派の無我論批判においては、アートマンの知識の統合主体として

の側面が重要な意味を持つ。知識が自己認識を本質とするかぎり、想起は過去の直接経験を把握することも、過去の直接経験との類似性を把握することもない。したがって、仏教論理学派は過去の直接経験が現出する想起を正当化しえない。しかしながら、再認識派においては、過去の直接経験と想起という二つの知識の統合主体としてアートマンを認めるから、想起を正当化しうるのである。仏教論理学派は、自己認識の理論を奉じ、想起を合理的に説明するためには、統合主体としてのアートマンを認めなければならぬのである。

[略号及び参考文献]

Bh: *Bhāskarī* (Bhāskarakaṇṭha). See IPV.

IPK: *Īśvarapratyabhijñārikā* (Utpaladeva): Torella, R. ed. *The Īśvarapratyabhijñārikā of Utpaladeva with the author's vṛtti*, Serie Orientale Roma 71. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

IPKV: *Īśvarapratyabhijñārikāvṛtti* (Utpaladeva). See IPK

IPV: *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī* (Abhinavagupta): Iyer, K.A.S. and Pandey, K.C. ed. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī of Abhinavagupta*, The Princess of Wales Sarasvati Bhavana Series, no. 70, 83. Allahabad, 1938, 1950. [Reprinted 1986: Delhi: Motilal Banarsidass]

KSTS: Kashmir Series of Texts and Studies.

PHr: *Pratyabhijñāhṛdaya* (Kṣemarāja): J.C. Chatterji, ed. *The Pratyabhijñāhṛdaya being a Summary of the Doctrines of the Advaita Shaiva Philosophy of Kashmir by Kṣemarāja*, KSTS 3, Srinagar, 1918.

PPr: *Parāpraveśikā* (Kṣemarāja): Mukunda Rāma Shāstri, ed. *The Parāpraveśikā of Kṣemarāja*, KSTS 15, Bombay: Tattvavivechaka, 1918.

PDhS: *Padārthadharmasaṃgraha* (Praśastapāda): Vindhyesvari Prasad Dvivedin, ed. *Padārthadharmasaṃgraha with Śrīdhara's Nyāyakandalī*, Delhi: Sri Satguru Publication, 1984 (1st ed. in 1895).

SK: *Sāṃkhyakārikā* (Īśvarakṛṣṇa): Pāṇḍurang Jāvaji ed. *The Sāṃkhya Kārikā of Mahāmuni Svī Īśvarakṛṣṇa, with the Comm. Sārabodhinī of Paṇḍit Śivanārāyaṇa Śāstrī with Sāṃkhya Tattvakaumudī of Vāchaspati*

Miśra, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1940.

ŚS: Śivasūtra (Vasgupta): J.C. Chatterji, ed. *The Shivasūtravimarśinī being the sūtra of Vasgupta with the Commentary called Vimarśinī by Kṣemarāja*, KSTS 1, Srinagar, 1911.

ŚSV: Śivasūtravimarśinī (Kṣemarāja). See ŚS.

Upad: *Upadeśasāhasrī* (Śaṅkara): Sengaku Mayeda ed. *Śaṅkara's Upadeśasāhasrī, critically edited with introduction and indices*. Tokyo: Sankibo Press, 1973.

金倉 円照

1984 『真理の月光』 東京 講談社。

前田 専学

1988 『ウパデージャサーハスリー』 東京 岩波書店。

注

- (1) IPK 1.1.1: kartari jñātari svātmany ādisiddhe maheśvare / ajaḍātmanī niṣedham vā siddhiṃ vā vidadhīta kaḥ // (「行為主体であり、認識主体であり、自己のアートマン (ātman) であり、始めから確立されている大主宰神に関して、どんな精神的なアートマン (ajaḍātman) が、確立あるいは否定をなしえようか」)
- (2) 主宰神に他ならないアートマンは、認識主体としても認識対象としても光照する。IPV 1.1.2: sa īśvarasvabhāva ātmā prakāśate tāvat, tatra ca asya svātantryam iti na kenacid vapuṣā na prakāśate, tatra aprakāśātmanāpi prakāśate prakāśātmanāpi. (「かの〔行為主体であり認識主体である〕主宰神に他ならないアートマンは、確かに (tāvat) 光照する。そして、その〔アートマン〕は、光照〔の行為主体であること〕に関して自主的である。したがって、〔アートマンは〕どんな形態 (vapus) でも光照しない、ということはない。その場合、光照を本質としないものとしても光照する。光照を本質とするものとしても〔光照する〕」)
- (3) マーヤー認識主体には、「空なる認識主体」(śūnyapramāṭṛ), 「統覚なる認識主体」(buddhipramāṭṛ), 「プレーナなる認識主体」(prāṇapramāṭṛ), 「身体なる認識主体」(dehapramāṭṛ) がある。これらは、自己のアートマンを、それぞれ空、統覚、プレーナ、身体として捉える認識主体である。これらの認識主体は、アートマンを誤認しているため、輪廻している認識主体なのである。この内、「空なる認識主体」とは、熟眠や対象が帰滅した段階において対象が存在しないように、対象を持たない認識主体である。

- (4) ŚS 1.1: caitanyam ātmā // この偈では、‘ātman’は「アートマン」だけではなく「本質」(svabhāva)をも意味する。その場合、「精神性が〔究極的実在の〕本質である」と解釈される。
- (5) 注1をみよ。
- (6) ヴァイシェーシカ学派では、アートマンは知を本質とするものではなく、知を属性とする。アートマン自体は非精神的なものである。See PDhS 95: buddhisukhaduḥkhecchādveṣaprayatnadharmādharmabhāvanāśabdā amūrtaḡuṇāḥ //
- (7) サーンキヤ学派によれば、認識 (jñāna) は純質的な覚の属性 (buddhi-dharma) である。SK 23: adhyavasāyo buddhir dharmo jñānaḡ virāga aiśvaryaḡ / sāttvikam etad rūpaḡ tāmasam asmādū viparyas tam //
- (8) ŚS 3.1: cittam ātmā //
- (9) 「アートマンは精神である」という言明は、マーヤー認識主体の特徴を述べたものである。PHṛ6: cittamaya eva māyīyaḡ pramātā / amunaiva āśayena śivasūtreṣu vastuvṛttānusāreṇa ‘caitanyam ātmā’ (ŚS 1.1) ity abhidhāya, māyāpramātrīlakṣaṇāvasare punaḡ ‘cittam ātmā’ (ŚS 3.1) ity uktam //
- (10) ŚSV on ŚS 3.1: ...tadadhyavasāyādivyāpārabuddhyahankṛṇmanorūpaḡ cittam... (「それらの〔対象〕の決定などをハタラキとする統覚、自我意識、思考器官を本質とする精神」)
- (11) ŚSV on ŚS 1.1: cetayate iti cetanaḡ sarvajñānakriyāsvatantraḡ, tasya bhāvaḡ caitanyaḡ sarvajñānakriyāsambandhamayaḡ paripūrṇaḡ svātantryam ucyaḡ / tac ca pamaraśivasyaiva bhagavataḡ asti / anāśritāntānām tatparatantravṛttivāt / (「‘cetana’ (「意識するもの」) とは、「意識する主体」であり、あらゆる認識や行為に関して自主的であるものである。‘caitanya’ (「精神性」) とはその属性であり、あらゆる認識や行為との関係からなる完全な自主性であるといわれる。そして、その〔精神性〕は、至高の最高シヴァにだけある。〔地を始めとして〕〔他と〕関係しないもの (anāśrita) に至るまでのものは、その〔最高主宰神〕に依存しているからである」)
- (12) SK 19: tasmāc ca viparyāsāt siddhaḡ sākṣitvam asya puruṣasya / kaivalyaḡ mādyasthyaḡ draṣṭṛtvam akartṛbhāvaś ca // (「また、かれに反するので、この霊我が証人であること、独存であること、中立者であること、見る者であること、及び非作者であることが、確定する」(金倉[1984] 訳))

- (13) Upad 1.15.37: samastaṃ sarvagaṃ śāntaṃ vimalaṃ vyomavatsthitam / niṣkalaṃ niṣkriyaṃ sarvaṃ nityaṃ dvandvair vivarjitaṃ // (「[それは] 全体であり、一切に遍満し、寂靜であり、汚れなく、虚空のように安定し、部分をもたず、行為をもたず、一切であり、常住であり、二元対立を越えている、[と知るべきである]」前田 [1988] 訳)) ; See Upad 1.8.3; 1.14.22; 1.18.26; 1.18.80; 1.18.90 etc..
- (14) 例えば、プラジュニャーカラグプタは次のように述べている。PVA 292, 16-17: tatra smṛter vāsanāmātrakād udayaḥ (「その場合、想起はただ潜在印象だけから生じる」)
- (15) IPK 1.3.2: dṛk svābhāsaiva nānyena vedyā rūpadṛṣeva dṛk / rase saṃskārajatve tu tattulyatvaṃ na tadgatiḥ // (「知識 (dṛś) は、自己顕現するもの (svābhāsā) に他ならず、他 [の知識] によって認識されえない。ちょうど色の知識によって味に関する知識が知られないように。[想起は] 潜在印象 (saṃskāra) から生じることを根拠として、その [過去の直接経験] との類似性はある。しかし、その [過去の直接経験] の把握はなく、その [過去の直接経験との類似性] の把握もない (tadgati) 」) ; IPKV 1.3.2: ... pūrvānubhavasamṃskārajatvena tatsādṛśyamātraṃ na tu pūrvānubhāvavagatiḥ, tadabhāvāt tatsādṛśyam api nāvaseyam // (「[想起は] 過去の直接経験に基づく潜在印象から生じるから、その [過去の直接経験] との類似性だけはあがるが、過去の直接経験を把握することはない。その [過去の直接経験の把握] がないから、その [過去の直接経験] との類似性もまた確定されえない」)
- (16) Bh on IPV 1.3.2.7: tatsamṃskāreṇa—ādyānubhavasamṃskāreṇa, saṃskṛtāt—smṛtyautpādane samarthīkṛtāt ... samanantarapratyayāt—saṃskārodbodhakasādṛśajñānāt (「tatsamṃskāreṇa 「その潜在印象によって」: 過去の直接経験の潜在印象によって。saṃskṛtāt 「能力が与えられた [等無間縁]」: 想起の生起を可能にする [等無間縁]。(中略) samanantarapratyayāt 「等無間縁に基づいて」: 潜在印象を生起せしめる [過去の直接経験と] 類似している知識に基づいて」)

